

# 兵庫県現代詩協会 会報54号

2023年12月1日 発行：時里二郎

## 「ふれあい文化の祭典

## 詩のフェスタひょうご2023」報告



十月一日(日)午後一時半から四時過ぎまでラッセルホールで「詩のフェスタひょうご2023」が開催されました。

百十七名の参加申し込みがあり、当日は百三名の参加者で盛会のうち無事終えることができました。今回は中・高校生を含め若い参加者が多く参加してくれました。

丸田礼子さんの司会で始まり、時里二郎会長の挨拶のあと、大きな拍手で、峯澤典子さんが登場され、私の詩との出会い・詩の言葉とは、「詩のはじまり」をどう作品にするかなど「わたくしの詩の読み方・書き方」と題して分かりやすく丁寧な講演をしていただきました。

神田さよ副会長の閉会の挨拶で出版物の販売の案内を予定しておりましたがそれ以前にすでに完売しておりました。

講演会の大成功を喜び、皆さんのご協力に感謝いたします。

兵庫県現代詩協会といたしましてはこのような機会に詩を書く人が増え、私達と協会で一緒に書いていけたら嬉しいことだと思っています。

報告 野口幸雄

### ■講演会報告

一時間半を超える濃密な講演は、「詩との出会い・詩作のきっかけ」からスタート。

峯澤さんは、子ども時代は人と話すのが苦痛で、集団が苦手だったそう。「ことばで交わされるコミュニケーションと内心との違和」を感じていた小学生の頃、幸運にもこの詩に出会った。

かなしみ 谷川俊太郎

あの青い空の波の音が聞こえるあたりに  
何かとんでもないおとし物を  
僕はしてしまったらしい

透明な過去の駅で

遺失物の前に立ったら

僕は余計に悲しくなりました

『二十億光年の孤独』より



悲しいままでいいんだ。答えを出さなくてもいいんだ。この詩と出会って、少女ノリコの思いわずらいは一気に吹っ飛んだ。うれしくてスキップした(かもしれない)。「詩のことばたちは、悲しみに包みこまれてる私の傍らに留まって、ずっと寄り添い続けてくれるもの」であると思

えた。この詩と出会ってからはじめて、言葉を信じてみようと思ひ、「この詩に返事を書こう」と心深くに誓う。

その後の、詩作を続ける中での一貫した思ひは「たった一人の人に、でよい。私のように人と話すのが苦手で、集団から離れて独りで俯いている人に届く詩を、その人のところに届ける」と。

次に語られたのは、詩の言葉とは？

詩は、単なる伝達文や情報文ではない。ポール・ヴァレリィは言う。「散文は歩行であり、詩は舞踏である」と。また、ノーベル賞受賞詩人のオクタビオ・パス曰く「詩は言葉の可なりたにある何か、意味以前のものを普遍的に伝える、共有し続けるものである」と。菅野昭正の言葉から、詩とは「伝達の方法からの開放」であり「生き直すこと」であると。さらには、大江健三郎の「詩は読み終わりのないもの」も紹介された。

前半の締めは「詩のはじまり」をどう作品にするか。

いよいよ実作編突入か。詩作の秘訣を聞き漏らすまいと、場内はノートとペンを取り出しての学習態勢。

語られたのは、人や物や出来事に対する五感の動き、見聞きした単語やフレーズ、過去の記憶、好き嫌い、音楽や映画・演劇など創作物からの影響や刺激など。全てが思い当たるものばかりのだが。

詩は、異次元から降誕するものでもなければ、未知の世界を覗き見ることでもない。日常にあることに五感を研ぎ澄ませて向き合う。その内面から湧き立つものを捉えること。肝心なのは、「一時的な感情や常識や思い込みにとらわれず、自分の中にいったん取り込み、そこから自由に想像や感覚を広げる」など、具体的な手法が丁寧に説かれた。実作編の締めくくりは推敲について。「何日もかかって書き終えた詩を、私は、何度も何度も音読し、どこにも引っかけが無くれば仕上がり」だと。

さて、後半からは詩の鑑賞について。前半で説かれた詩の書き方・向き合い方を深めるべく、多様な詩人の多様な作品を鑑賞していく。

辻征生「かぜのひきかた」(『かぜのひきかた』より)日常を独特の感性で捉え、名付けられない普遍性として詩のことに昇華させる巧みな技。一見軽やかだが、深い。恥じらいやユーモア、あたたかさ、生きることの不安や心細さなどに染み入る。

池井昌樹「半跏思惟」(『晴夜』より)詩の全編ひらがな表記。漢字と違って、ゆつくり目で辿ることにより、ゆるやかに心に届く。人間のいのちの果てにあるもの。祈るような思いで向かい合い、言葉によって見直す。

高橋順子「ふるえながら水を」(『この木のことを』)「時の雨」より)強迫神経症に苦しむ夫直木賞作家の車谷長吉に寄り添い続けた順子。先の見えない絶望の中にありながら、淡々と遠い未来から俯瞰する視点で詩作する。視線を遠くに置き、重力のある作品。時には、ふと心から漏れてしまった切実な願いを滲ませながら。

さらには黒田三郎、小池昌代、峯澤典子の最新詩集を鑑賞。各作品の峯澤流鑑賞にうっとり。とはいえ、本日のテーマ「わたくしの詩の読み方、書き方」で明らかのように、詩の読み方書き方はそれぞれであると。さて、「わたくし流」の書き方読み方探しの旅に出よう。

講演は「詩で救えないものは、ない。」の言葉で締められた。講演後の質疑応答も熱気に満ち溢れたことは言うまでもない。

報告 山下輝代

## ■第24回読書会「峯澤典子を読む」報告

六月二十日に近畿の梅雨明け発表があったその直後の暑い日の読書会にもかかわらず、参加申し込み者の一名のキャンセルもなく盛況な会であった。それだけ峯澤典子さんは皆に待ち焦がれられた詩人なのだろう。

発表者の高橋富美子さんの何とも言えない優しい朗読がとてもよかった。本人は、ご家族が入院中で、その疲れで声が出にくいとおっしゃって、そしたら会場から、風貌・声ともがつつり(ごめんさい)高木敏克さんが、「僕らが朗読



第24回読書会 チューター 高橋富美子

しますよ」と高橋さんへの援護発言もあり、中에서도なく朔太郎でもなく生活詩でもない、不思議な世界へ誘ってもらった。また資料に伊藤比呂美さんの「カノコ殺し」が添えられていて、その対比もおもしろかった。詩のフェスタひょうごの講演が楽しんだ。読書会の参加人数は26名。

報告 山口洋子

## ■〈みんなで語ろう『ひょうご現代詩集2022』が開かれる〉

笑顔と詩の言葉が交わされていた。

参加したのは、すべて兵庫県現代詩協会の会員である。総会や読書会で顔を合わせることがあっても、語り合う機会はそう多くない。そうしたなか詩人同士として、自分の詩作品を合評する会が実現した。

6月18日(日)

神戸市中央区文化センターで〈みんなで語ろう『ひょうご現代詩集2022』の会







「語る会」の感想を語る時里会長

合が開かれた。今年2月に上梓された『ひょうご現代詩集2022』に掲載された自作作品を、会員同士で語り合おうという企画である。このアンソロジーは通巻15冊目を数えるが、こうして会員が集まって合評しあうというのは、協会が誕生して以来はじめての試みなのかもしれない。

参加を申し込んだのは27人。急用による欠席があり当日の出席者は25人だった。会場では参加者を五十音順に二つのグループに分け、車座に椅子を並べ直し、さっそく合評を開始した。各グループの司会進行役は、この「語る会」の事務局を担当した大橋愛由等が指名。二人の司会者（大西隆志氏と高谷和幸氏）の手慣れた絶妙な司会進行ぶりに感謝してもしつくない。

合評会では驚きの連続だった。会員同士、名前と顔は知っていても、会員の詩作品というもうひとつのペルソナに出会えたという喜び。そして会員の詩を語るその語りを知ることが出来たという衝撃に似た感動。詩を語り合う快楽とその必然性を感じた時間はまたたくまに過ぎていった。

語る会の最後に挨拶した時里二郎会長の言葉を記述しておこう。「詩は書かなくてはと書いて書くものではない。自分がドキドキする気持ち（感動）があつてこそ、他者にもそのドキドキ感が伝わっていく。それぞれの詩は発想も違ふし使う言葉も



### ■『ひょうご詩の講座・第一回』

違う。しかし自分の中でどんな言葉が出てくるのかわからないといったドキドキ感、どんな詩を書くにしても一緒ではないか。詩を書いていると、作者自身どんな言葉の世界が広がっていくのかわからないといったことを、自覚しながら書き進めていくことが詩の面白さ。言い換えれば、どんな言葉の世界が紡がれていくのかというドキドキ感を頼りに言葉をつむいでいくことが、詩にとって大切なことではないか。そのように書き進めた詩の言葉が自分でも意味がわからなくなってもそれはそれで良いのではないかと思っています。

この語る会が起爆剤となり、兵庫県現代詩協会が今年度から始める「ひょうご詩の講座」に連動していけるよう願うばかりであった。

報告 大橋愛由等

十月八日の「ひょうご詩の講座」は初めての試みですが、兵庫県現代詩協会の会員維持増員を目的とするもので常任理事会提案され採択されたものです。会場は神戸の中央区文化センターなので交通の便も良く賢沢な環境での無料講座とあつて初めて詩を書く人にもお手軽な雰囲気始めることができました。

講座の本意は詩を読むみ詩作する講座によって新しい詩人の活躍を願うもので、そのため新しい詩人の登場を期待して県内の高等学校や大学の文芸部の顧問の先生がたにこの講座を紹介しました。神戸新聞の取材を受けての文芸欄の掲載記事のお陰もあり、定員十名を上回る参加



者を迎えることができました。これに先立つ十月一日の峯澤典子さんの読書会の余韻や会長の時里二郎さんの熱意もあり、講座はおおいに盛り上がりました。質疑応答の時間が足らなくなるくらいでした。さらに受講者全員が自作の詩を持参し、講師がその指導に当たったので講師の仕事が多すぎました。役割分担の再検討も必要かと思えます。事前

の打ち合わせと受講者の自作の詩の事前の読み込みは必要で詩の原稿は早期に提出してもらい講師の手に届ける必要があると思われまふ。

講座の出席者は既に新聞社の文化センターで詩の教室の中級の受講者もおられたが初心者の方が多くなりました。講師の時里二郎氏は「神戸新聞文芸欄」で詩の欄を担当し選者もしている、その中の優秀詩に触れながら、松下育男の「初心者のための詩の書き方」や谷川俊太郎の詩を解説しながら初心者の詩も解説した。その上で講師の詩作法と詩論を展開した。

講師の詩論の内容はメロドラマ風と言うと「私の外のもう一人の私」。  
レジュメの内容を箇条書きにすると、○私が言葉を持っている訳ではなく、○言葉が私を所有している。○私の中に言葉がある訳ではなく、○言葉の中に私がある。○したがって、詩はありのままの私を差し出せない。○言い換えれば、詩には（私の言葉というものはなく（言葉の私）があるだけである。

この詩が創る〈私〉は第二の〈私〉であるが三人称の〈私〉で自分を他者として見る〈彼〉と同格である。ただし、あくまでわたしの解釈です。

この時里さんのエッセイは高木流に勝手に小説に置き換えるのと解りやすいと思います。〈私の言葉〉ではまる小説は一人称の〈私小説〉であり、〈言葉の私〉で始まる小説は三人称の〈彼小説〉です。

例えば、時里二郎氏の「名井島」の「伯母」という詩に出てくる「アンドロイドである私には母がいるはずはないのに」の中に「ある〈私〉は詩を作る三人称の〈私〉なのだ」。

この展開をカフカの小説に移し替えて考えると、「城」に出てくるKは一人称のカフカが転位して生まれた三人称の言葉の私(詩の私)なのだ。

時里さんの結論は小説に一人称の〈私小説〉と三人称の〈彼小説〉があるように、詩にも一人称の詩と三人称の詩があり、〈私〉のない時里さんの詩は三人称あるいは無人称の詩であり、仮に「アンドロイドである私」が出てきても、それは三人称の〈私〉だということになります。

一人称の〈私〉か三人称の〈私〉なのかは詩においては見分けにくいですが……講師の分類によると、「石松佳」の「針葉樹林」の「梨を四つに」、「青野暦」の「冬の森番」「最果タヒのしろいろ」小池昌代の「遺物」時里二郎の「名井島」は私のない三人称詩になるようだが、おそらく時里さんにおいては、言葉は私の先を行く限りにおいて詩に私はないという信念がある限り「私詩」はあり得ないということになるようです。

今回の講座では初めて詩を書いた受講者もいたので、講師の時里さんが用意したレジュメは最後まででは解説できなかったようです。この講座は一人の講師による連続講座でないため講師から講師へと詩の基本がいろんな角度で解説されていくことになります。事務局長の野口さんと共に新しい詩人の成長を見守ることにしようです。

報告 高木敏克

## 第13回 ポエム&アートコレクション 2024

2024年1月11日(木)―16日(火)平日10時―17時(土・日9時―17時)。最終日16日(火)は15時まで。  
会場：神戸文学館 〒657-0838 神戸市灘区王子町3-1-2 Tel&Fax 078-882-2028  
(阪急電車王子公園駅西へ徒歩7分 JR 灘駅北へ徒歩10分 王子動物園西隣)  
主催：神戸文学館・兵庫県現代詩協会 後援：日本現代詩人会・半どんの会

### 1. 詩・アート作品展示

会員による詩・アート作品(絵画・書・オブジェなど)の展示。  
\*搬入：1月9日(火)13:00―13:30(15:00までに作品展示作業完了のこと)。  
\*搬出：1月16日(火)15:00  
なお、宅急便での搬入・搬出は不可。車での搬入・搬出の方は、年内に神戸文学館(078-882-2028)までお申し出ください。(2台分の駐車スペースあり)。  
\*参加費 1作品500円(2作品まで可)搬入時に納入してください。

### 2. 講演会

演題：「安水稔和の人とその詩の世界」 講師 たかとう匡子氏  
日時：1月13日(土)14:00―15:30  
\*講演会に参加ご希望の方は、神戸文学館(078-882-2028)に事前に直接お申し込みください。

### 3 「詩の現在展」

本年も会員の詩集、詩誌を展示します。(担当：福永祥子・福田知子)

## 《第10回文学紀行 文化薫る芦屋の街ぶらり歩き》

2024年3月10日(日曜日) 雨天決行

集合 阪神電車芦屋駅東改札口 10時00分

※注意 西改札もありますが東改札口です

※行程 10:00 阪神電車芦屋駅集合⇒徒歩にて芦屋公園を抜け(猿丸安明の碑・慰霊と復興のモニュメント・ぬえ塚)など見て、芦屋川に架かる鶴塚橋を渡る⇒10:20 虚子記念文学館⇒芦屋市立美術博物館⇒小出権重アトリエ⇒谷崎潤一郎記念館⇒富田碎花旧居⇒13:30 芦屋 食&人の縁 うたげ⇒解散

§虚子記念文学館・谷崎潤一郎記念館では学芸員の説明予定(調整中)

- ・虚子記念文学館は「青畝と虚子展」開催で最終日
- ・谷崎潤一郎記念館は「冬の特展」開催で最終日
- ・芦屋市立美術博物館は「第67回芦屋市展」開催中

昼食は「芦屋 食&人の縁 うたげ」にて、コンテスト受賞作全部盛りランチ(限定)

参加費 3,000円(昼食代含む)・観覧料等は各自負担

§観覧料に関して、JAFカード、HANKYUカード個人、STACIAカードは割引有り

申込は同封葉書でお願いします。締切2月26日(月) (担当・大西隆志)

## ■会員の詩集評

時里 二郎

○たかとう匡子『私の女性詩人ノートⅢ』(思潮社七月刊)。たかとうさんの『私の女性詩人ノート』はこれまでのⅡ巻分を合わせて、全三巻が完結した。与謝野晶子から始まって、蜂飼耳まで三十八人も詩人が取り上げられている。彼女の詩人論の特徴は、女性詩人が、時代とその人生のなかで、詩とどのように出会ったか、また、どのような詩の世界を開いていったかを、具体的な作品を通して読み解いていく。その手際の、実に丁寧で、配慮の行き届いた真摯な筆致は強く印象に残った。詩人の生きた時代や詩人の生活や人生、また、他の詩人との影響関係なども丁寧に読み込んでいく。それは「私のノート」という枠をはめることで、特に詩の批評にありがちな硬直したスタイルを免れていることも特筆すべきだが、もう一つ重要なのは、彼女自身の詩の遍歴と照らしながら、対象詩人を読み込んでいくこと。それは「私のノート」であるがゆえにできたものだろう。そのスタイルが、批評のわかりやすさを生み、それ以上に、共感をこめて採り上げた詩人の魅力を描くなから、多くの読者に、先達の詩人や、これからの詩人たちの世界を知らせたいという強い思いが伝わってくる。

その上で、この詩人論に見られる彼女の批評の特徴的な二つの視点をあげておきたい。一つは、彼女が神戸というトボス(場所)ですつと詩を書き続けたことの意味を彼女自身が自らに問いながら書いていること。「東京にいたら・」という正直な感慨を書き付けた箇所があるが、中央から逸れた地方で書き続けてきたことを、詩の辺境で書き続けた詩人たちを追いながら、西岡寿美子(場所・風土)や塔和子、栗原貞子(境遇や時代)などを対象として、詩を発信することの意味を問うている。

もうひとつは、女性詩人の批評の言説への期待。掉尾に蜂飼耳を据えたところにそれは強く表れているし、河津聖恵を論じた章にもそれを強く感じる。批評の営為が、今まで男性優位に見られてきたことは否めない。それを痛感し、女性性に頼らない批評の言葉が、「女性詩」や「女性詩人」という言葉を終わらせる鍵だと彼女は考えているのだ。

たかとう匡子の『私の女性詩人ノート』で論じられた三十八人の詩人の詩の営為が、現在の女性詩人たちの、未

知な詩の言葉へのゆるぎない足取りを支えているという実感は評者だけのものではないだろう。(現代詩手帖十一月号を抄録した)

○神尾和寿『巨人ノ星タチ』(思潮社六月刊)。前詩集の『アオキ』が二〇一六年刊行だから七年ぶりの第七詩集。本欄で『アオキ』について、飛躍的に彼の詩の世界のステージを高めた記念碑的な詩集だと言ったが、『巨人ノ星タチ』はその言葉の足取りをより確かなものとして、神尾さんの詩のスタイルをゆるぎないものとしたと言つてよいのではないだろうか。

「ツチとサツチが相談を して／まとまらない 地震が起きても／火事になつても／電信柱の影で／じつと待ち続けている人がいる その人／のことも心から褒めてあげても／いいのかなどうかなさつきから／相談」(二〇一六年から二〇一七年にかけての 宇宙への旅―4)

「美味しそうなソフトクリームを／ぼくは 見つけた／握りしめたらお金が足りない／青ざめる 腕を組んで思案する／断念するか かつぱらうか 何事もなかつたかのように 記憶を消すか ぼくをなくすか／その間にも地下では／必死の救命活動が続いている」(同―5)

彼の詩はナンセンスなライトベースのように見えるが、「そのナンセンスには意味も比喻も寓意もない」と前詩集評で述べた。さらに踏み込んで言えば、彼の詩は通常の詩にありがちな詩人の情感や心情を表現しようという意図がない。言わば自らの思想や信条を伝えたり表現したりする詩ではない。ではどんな詩かと言えば、詩人から言葉を拉致して、言葉の身体によって書かれた詩なのだと言えはしまいか。詩人は言葉に蹴飛ばされてはるか速くに退き、言葉の身体が言葉を紡ぎ出している。むしろ、詩人の身体と言葉の身体との紐帯はお互いに切れないものだから、言葉の身体は詩人の身体を操つて、その表現の端々に鷹の詩人の身体を出し入れしている。もともとライトベースは、言葉の身体が詩人の身体を軽やかに踊らせる体のものを思い出してよい。

この詩のスタイルの背景には、詩人は言葉を所有しているのではなく、むしろ、言葉のなかに詩人はいるという思いがあるのではないか。言葉は自分の手足のように生まれながらにして自由に扱えるものではなく、生まれたあとから与えられたものであり、その他者である言葉によって私たちが自

身が定義され生まれるのだという思想はもう自明のことになつている。

○朝倉裕子『母の眉』(編集工房ノア九月刊)。『詩を書く理由』(二〇〇八年刊)に続く第二詩集である。「あとがき」(詩集を読んだあとに、このあとがきを讀み、再び詩集を讀むと、より深くそれぞれの詩を味わいを深めることができる)によれば、作者の母は父が亡くなつてから「四半世紀を一人で暮らし、八十八歳で娘(作者―引用者註)と同居することになつた」とある。母の亡くなるまで「八年弱」の間の「尊い時間」を中心に詩集は編まれている。

「母は中華そばを／一筋ずつ口に運びながら／こんなのは食べたことがないと言う／昔作つたかな／忘れたかな／夢のようにつぶやく／お好み焼きもおいしいと言う／そして／こんなのは食べたことがないと言う／土曜日はいつもお好み焼きだが／「おいしい」と「初めて」はひと続きらしい／この家に暮らして丸三年／「初めて」が増えていく」(初めて)全編)

まずこの詩集の全編を貫く《静かさ》に強く引かれた。言葉は、余分なところははいっさいない。この作品も母の言葉と作者のつぶやきのような言葉だけでできているが、そのほかの作品の表現も形容詞などの修飾語はほとんどなく、つけないくらいに簡素だ。もちろん、母に対する作者の情感の思いの一切が語られない。それは、すべて読み手にゆだねられている。

この詩の世界の静かさ、寡黙さは、母への思いや愛しさや母を喪つたかなしみの深さの裏返しである。言葉をいくらか尽くしても、その思いの深さを表現できないことを、作者は十分知っているのだ。むしろこれらの母への思いの丈は、この詩集の静かさや寡黙さを通して読む人にゆだねられている。やはり、母の臨終を描いた「そのとき」を引用しないわけにはいかない。

「規則正しく／でも だんだん／弱くなる／／呼びかけ／体をゆすると／吸う息の音／吐く息の音／待つときがあつて／名前を呼ぶ／体をゆする／スーと吸う音がして／吐く音があつて／待つ／呼びかける／ゆする／／聞こえない／口の形はそのままに／もう／息だけがない／／まだ応えようとしている／母／そのとき」(そのとき)(二)全編)

もうひとつ、全編にわたって、合歓や梅やセンダンなどの植物が、詩の時間や空間を彩っているのも印象に残った。

○野元 正『こころへ文学道途』(神戸新聞総合出版センター10月刊)。副題に「花と川をめぐる風景」とあるように、「神戸を舞台にした文学作品から作家たちが描いた花と川の風景を訪ねて」と紹介文に。野元さんは、小説家だが、実は造園家でもあり、京都大学で造園学を学ばれ、神戸市の公園砂防部長として、公園緑地の設計や管理も担ってこられた人である。「須磨離宮公園」「しあわせの村」「布引ハーブ園」などを、プランや設計から手がけておられることも評者は初めて知った。同時にそれらのお仕事の傍ら小説も書いてこられた方。

そのような経験を生かして、「花と川」に焦点をしばって神戸を舞台にした文学作品を風景や風土とともに描いているのだが、その紹介された花と文学作品が実に多彩で、こまやかに資料や写真などをふんだんに使って、読む人を引きつけてやまない。その詳しい解説や記事に、あまりにも知らないことはかりで、度々目を瞠った。

神戸新聞総合出版センターの刊行なので、書店で手に入りやすいのもありがたい。

たとえば「梅」の章では、「谷崎潤一郎の『鶴唳』と鎖瀾閣と岡本公園」など知らなかったし、「桜」は水上勉の『櫻守』と岡本南公園―これも未聞だった。谷崎潤一郎『細雪』と紅枝垂れ桜。ほかに「オリブ」「ミモザ」「菜の花」「彼岸花」など、花は二十四種。川は芦屋川・住吉川、石屋川、生田川など十二川に及ぶ。それぞれの花や川の章で紹介されている文学作品は、私たちに馴染み深いものももちろんあるが、文学史に埋もれている作家や作品も多く、野元さんの花や文学の博識に驚かされる。

なんと言つても、この一冊を手にして、それぞれ描かれた神戸の場所に足を運んで見たい気がする。当協会で行っている文学散歩の参考にもなるようだ。

■常任理事会報告

2023年度 第1回常任理事会 6月4日(日) 13時より

神戸市中央区文化センター 出席11名 欠席2名

\*退会1名 現在の会員数122名 \*みんなて語ろう

『ひょうご現代詩集2022』参加申込29名 \*名簿メールアドレス記載20数名 QRコードを載せる\*会報

発行 7月1日 発送6月30日 \*読書会 「峯澤典子の

詩について」7月22日 13時より チューター 高橋富美子 \*詩の講座 実施日・10月から2024年3月まで毎月第2日曜日 今後毎年開催予定 講師は会員に葉書で希望者を募る。 \*詩のフェスタひょうご 実施日時10月1日(日) 13時30分から16時30分 場所ラッセホール・サンフラワー 講師 峯澤典子 演題 未定 タイムスケジュールと役割分担を決めた。 \*年間事業の日程検討 \*来年度の総会までに、総会の手順を作成することにした。事務局長が作成

第2回常任理事会 7月1日(土) 13時から 神戸市中央区文化センター 1101号室 出席12名 欠席 1名

\*入会2名 現在会員数 119名 \*会計報告4月、5月、6月 \*「アンソロジー参加者の集い」報告 参加者

数 25名 今後アンソロジー発行時に継続して行う。 \*読書会 次回7月22日 13時から神戸市教育会館205号

室 峯澤典子の詩について チューター 高橋富美子会

員 次次回の読書会11月25日 鳴海英吉について チュ

ーター 玉川侑香 \*詩のフェスタについて チラシ校正

提出書類の検討 \*ボエム&アートコレクション 神戸

文学館 2024年1月11日(木) 16日(火) 搬入 1

月9日・搬出 1月16日 特別イベント 1月13日(土)

14時 講師 たかとう匡子 安水稔和について(確定演題

は未定)

\*ホームページ 詩のフェスタ・読書会をアップ。 \*詩の

講座について 名称「兵庫詩の講座」とする。県内の教育

施設などに案内をする。第1回10月8日 神戸市中央区民

センター \*文学紀行 日程 3月17日(日) 次回常任理

事会で決定。

第3回常任理事会 8月26日(土) 13時30分から 神戸市

中央区文化センター 出席11名 欠席2名 \*退会1名

現在の会員120名 \*7月会計報告 \*読書会報告 峯

澤典子を読む 参加者26名 会報報告山口洋子会員 \*

ボエム&アートコレクション 会員への案内文発送済

\*会報 特別号 54号の発行予定日12月1日。原稿締切

り10月15日 各担当に原稿依頼済 \*「宝塚詩の会」報告

参加者9名 テーマ茨木のり子(チューター 芦田はるみ)

五行詩作成 参加者作品合評 次回11月12日(日) \*ひょうご詩の講座 10月8日(日) 13時30分 神戸市中央区文化センター1104号室チューター 時里二郎 以後11月 江口節 12月 神尾和寿 1月 北野和博(安水稔和) 2月 玉井洋子(竹中郁) 3月 神田さよ(杉山平二) \*文学紀行3月17日(日) 阪神芦屋駅集合10時 解散15時ころ 谷崎潤一郎記念館、虚子記念文学館等 報告 神田さよ

■他団体会報・詩書(2023・8月~10月)

- 島根県詩人連合会報 No.92
- 北海道詩人 No.154
- 埼玉詩人会会報第103号
- 福島県現代詩人会会報第132号
- 中日詩人会会報 No.208
- 中四国詩人会ニューズレター第53号
- 日本詩人クラブ広報104号

事務局が変更になっていきます。郵便物などはこちらへお願いします。事務局・野口幸雄 住所：〒657-0846 神戸市灘区石屋北町44-5-902

■会員の詩集・詩誌(2023・7月~10月)

- 『夜があげる』永井ますみ詩集(5月刊・山の街企画)
- 『巨人ノ星タチ』神尾和寿(6月刊・思潮社)
- プラタナスVOL71(神戸詩人会議玉川侑香)
- 風の音第25号(野口幸雄)
- Message 61号(佐伯圭子)
- 別嬢 No.117(高橋夏男)
- 現代詩神戸281・282(永井ますみ)
- ア・テンポVOL63号(玉井洋子)
- MAROAD VOL184・185(大橋愛由等)
- 鶴鶴20(江口節)
- 多島海43(江口節)『水差しの水』江口節詩集(9月刊・編集工房ノア)

■会員の動静・イベント報告

- 会員の動静
- 高木敏克 半どんの会文化賞
- 江口節『水差しの水』小野十三郎賞



たかとう匡子 令和5年度兵庫県文化賞

○宝塚詩の会

主催：兵庫県現代詩協会・宝塚詩の会 【メンバー山下輝代(代表) 芦田はるみ、神田さよ】参加者数 9名(野口事務局長参加) 内容：茨木のり子の作品と略歴・5行程度の詩を作成・参加者持参の作品の合評。今後、開催は3カ月に一度。年4回。次回、11月12日(日)＊杉山平一について・作品合評。

○第二六回ロルカ詩祭

―ロルカが殺された八月一九日に神戸に集い慟哭の詩を彼に捧げるのです―

フエデリコ・ガルシア・ロルカはスペインの国民的詩人で、一九三六年ファシスト叛乱軍により銃殺されました。当時詩と文学にかかわる人たちにとつては、大きな衝撃で多くの追悼詩が残されています。この詩祭は、毎年彼の命日周辺の土曜日に開催されています。ロルカ生誕百年の一九九八年から、阪神淡路大震災をこえ東日本大震災をこえ、神戸三宮のスペイン料理カルメンがその会場です。オーナーの大橋愛由等詩人と、彼を取り巻く詩を愛する人たちとの情熱が、継続されてきました。今年はこちらより没後八七年の命日と重なり、更に熱い夜になりました。参加するのは私も含め兵庫現代詩協会員が半数以上、特に私など所属する会もないが、興味あるならどうぞという門戸の広い集まりです。そのお陰で、寡作な私も夏に一作書き上げます。そしてやはり詩人は個性豊かで、その場で様々なタイプの詩人と詩作に相見えることとなります。知らず知らずのうちに心は高ぶって、そんな真夏の詩的夜の作り方を紹介します。

準備

先ず当日発表する詩稿を五〇部持ち寄ります。半分に折り香盤表に従って重ねて綴じ、全員で「八月十九日詩集」を作ります。それぞれが五〇部持参したはずが、びったりと揃うことがありません。何故か不思議でそれも個性かな。そして冊子ができたところで、伴奏者と打ち合わせます。今年の新進気鋭(私たちより若者 津軽三味線奏者彌月大治さんは、フラメンコ・ギターリストでもあり、受賞歴も多く和と洋両方OK！朗読のバツクに音楽が入り、今年は和か洋かも選んで一段と弾みが付くのです。伴奏の希望を伝え、それが済むと本番までは自由時間、周囲は飲み屋街のため、先ず一杯と直行する者多数。

本番

第一部 五時開場五時半スタート、五人の詩人が自身で選

んだロルカ詩を朗読します。調整して同じ詩を読むことがないこれも個性というか好みもそれぞれ。その後、本日の伴奏者彌月さんによる津軽三味線のソロ演奏。それがまた、なかなかの迫力でずつと聴いていたい気もするけれど、コンサートではないので・・・



第二部 今年は一二人の詩人と俳人一組参加。これまたそれぞれ服装・風貌からして実に個性的、もちろん詩も俳句もその人のスタイルに貫かれています。お色直し有り？ また朗読の仕方も絶叫もあれば淡々と、とにかく聞かせます。鳴り物を持つ人、原稿用紙を散らす人等々、パフォーマンスもその人ならではの、とにかく集まった人数分の個性が炸裂するのです。今の世の中みんな違ってみんな良いといながら、変わらない付度社会だけに、

それぞれが個としてしっかり立っている姿は、とにかく清々しい。そして言葉が生きていると感ぜられることも、書く者の特権かと。今回は俳人も参加されたが、詩とは異なる言葉の密度を感じさせられました。詩と俳句の表現手段は違えども、言葉のエネルギーをどう生かすか、苦心するところは同じだろうとスペイン料理を肴に、詩に酔い、音楽に酔い、酒に酔い、熱い真夏の夜が更けていく・・・

最後は演者を再紹介して、主催者大橋愛由等詩人が締め括ってくれました。―ロルカの虐殺から九〇年近く経ったが、今も戦争は続いている。私たちは亡くなった詩人に、戦争で被害を受けた人々に祈りを捧げよう―より弱い者がより辛い目に遭う現実、世は不条理に満ち溢れている。なぜ書くのか、それに必要なことは何なのか、話を聞きながらそれぞれが書くことの意味を、改めて自らに問いかけたと思います。さあ、次を書こう。

さて、本日の主人公であるロルカさんは、終始静かに私たちを見下ろしていました。思えばロルカさんは年をとらない。そう彼は三八歳のまま死に続けている。死に続けることが、実は生きていることなのだ。ロルカさんと、ここに集った詩人俳人たちに乾杯！ もちろん詩祭の後、場を変えての打ち上げ会もまた楽しいひととき。何事であれ、楽しいことがなければ続かない。

■入退会・ご逝去

入会 永峰留美子・村上弘  
逝去 鈴木賀恵(7月16日没)

■新会員紹介

◇岩堀純子



〒663-8002 西宮市一里山 町16-110  
メールアドレス lonicer59@gmail.com  
プロフィール：出版社、新聞社で働いたあと、インドネシアの多様な文化と自然に魅せられ、留学。インドネシア語教師・通訳

詩集「水の感触」 編集工房ノア2013年「水の旋律」 編集工房ノア2015年7月

青い花

地平線の果てへとつづくわたしのなかの 草ぼうぼうの野原に改札がぼつんとあります 遠い日をめぐるて来た黒い列車がとまると

二、三人の人影が降り、躊躇うことなく改札を通過してゆきます

荷物をさげているものはいません すべてを失ったのかもしれない

わたる風はかすかな人の声を伝えます この遥か向こうに青い花が群れ咲いているそうです

五月の休みが終わるころシズエさんは病室の天井を見上げ

「あの青い花を見にいかないと・・・」と、誰にもなく言いました

シズエさんは次の朝、薄明りの時刻に亡くなりました シズエさんは、なぜきつぱりと青い花を見に行くことが

できたのだろうか いつものシズエさんが聖者のように思えました

緑の霧におおわれた野に目を凝らすと、改札の横にベンチが置かれ  
顔のない人たちが坐っています  
いつものまにかわたしもいます  
しかし、自分かどうかわかりません  
しばらく、ぼんやりしていました  
東の空がうすくれないかわりはじめています  
振り返ると、改札は消えています  
なぜ、わたしは此処にいるのだろうか  
どこでもない、此処に  
わたしがいた夜のように  
改札の向こうの青い花が  
わたしのなかで揺れています

◇永峯留美子



〒664-0865 伊丹市南  
町6-2-4 久保田方  
プロフィール  
詩作は福永先生の発行されてい  
る「汽水湖」第四五号の一篇に  
させていただきました。

螺旋階段  
登ったり 降りたり  
降りたり 登ったり  
前に進んでいるのか  
後戻りしているのか  
ふと  
踊り場で立ち止まり  
深いため息

どうしたの  
頑張っている彼方  
行く場所忘れたの  
蝉の抜け殻になってしまつて  
気分転換に快談でエネルギーを  
今は夏怪談で異次元へ  
螺旋階段のように  
ぐるぐるまわり道

視界も広がり  
気分も軽やかに  
次の場面へ

◇村上弘



住所…兵庫県川辺郡猪名川町松  
尾台4-5-26  
メール…murakamihromu  
@yahoo.co.jp  
詩誌「ターミナル」所属  
兵庫県川西市生まれ

ヤモリ

ヤモリの  
腹を  
撫でた

冷静に  
物事を  
処理していく  
寵児

朝が  
まだ  
まだ  
まだ  
続いてゆく



■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行っており  
読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。詩を  
愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を  
求めています。

入会申込 野口幸雄 ㊟0907963-0090

■ホームページにあなたのエッセイを

協会のホームページ「会員寄稿エッセイ」コーナーでは、  
会員のエッセイを掲載しています。詩人との出会い、同人  
誌の思い出、研究している詩人の事、日常ふと心をよぎつ  
た事等々。積極的な寄稿をお待ちしています。



- ・会員ならどなたでも投稿できます。協会か  
ら直接寄稿をお願いすることもありません。
- ・エッセイまたは評論をお願いします。
- ・連載も可能です。投稿数が多い場合はあな  
た専用のページを用意します。
- ・読みやすい縦書き三段組み、縦スクロール  
で掲載します。

・既発表・未発表を問いません。ただし原稿は電子デー  
タでお願いします。(手書きの場合はご相談ください)  
ホームページ担当理事・北野 (soranohtojp@yahoo.co.jp)  
まで、メール頂ければ、様式を送ります。

■会計より

順調に納入されています。なお、振込みの際は本名とペン  
ネームの両方をお書きください。会費は4000円です。  
振替口座 00920-9-111243 口座名 兵  
庫県現代詩協会 (担当 玉川侑香)

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送って  
ください。「詩の現在展」として展示します。詩に関するイベ  
ント情報や会員の動静もお知らせ下さい。

◎兵庫県現代詩協会事務局 野口幸雄方  
住所…657-0846 神戸市灘区岩屋北町4-4-5

・902 ㊟0907963-0090

◎会報編集 《高谷和幸》 ㊟079-447-3652

◎印刷《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川  
東4-17-31 ㊟06-6304-9325